

Title	西周の『生性発蘊』とコントの人間性論：資料としての検討
Sub Title	An examination of Auguste Comte's theory of human nature in Nishi Amane's "Seiseihatsuun"
Author	小泉, 仰(Koizumi, Takashi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1970
Jtitle	哲學 No.56 (1970. 10) ,p.1- 20
JaLC DOI	
Abstract	This is the second article in the series of study of Nishi Araane's theory of human nature. In this article we deal with his "Seiseihatsuun" which is supposed to have been written in about 1871-3. Although Nishi's "Seiseihatsuun" includes his own writings in part, yet the most part of it consists of his translation from G.H. Lewes' writings such as "A Biographical History of Philosophy" and "Comte's Philosophy of the Sciences." Accordingly we find Lewes' explanation of Comte's theory of human nature in this book. In this article we discuss Comte's theory of human nature and examine to what extent Nishi made use of Comte's theory as material in comparison with Nishi's "Hyakuichishinron."
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000056-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000056-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 西周の『生性発蘊』とコントの 人間性論

— 資料としての検討 —

小 泉 仰

われわれは、前掲論文『『百一新論』における西周の人間性論と荻生徂徠』において、西周が儒学的影響をまだ濃厚に残していた『百一新論』のなかで取り扱った人間性論を論じ、そこに荻生徂徠の深い影響を跡づけてみたのである。

そこで、当論文は、西がコントの統一科学思想に惹かれながら、さらにまたコントの人間性論にも興味を引かれていった明治4年から明治6年の執筆といわれる『生性発蘊』を取り扱い、そのなかに展開されたコントの人間性論を明らかにし、そこで西がどのようにコントの人間性論を資料として見ていたのかを検討してみることとする。

この『生性発蘊』は、G. H. Lewes の “A Biographical History of Philosophy,” The Library Edition, 1857 の一部と、同じくルイスの “Comte’s Philosophy of the Sciences: being an exposition of the Principles of the Cours de philosophie positive of Auguste Comte” の一部の翻訳を主とし、それに西自身の問題提起が最初に掲げられているものであり、しかも、それは、未完成の原稿の状態に残されたものが、大久保利謙氏編纂にかかる『西周全集一巻』宗高書房に収められたものである。

この書は、翌年明治7年7月から続けて7年12月に終る明六雑誌掲載の『知説』とくらべると、ほぼ1年ほど執筆時期が早い、『生性発蘊』の方は未定稿のまま残しておいて、『知説』の方は翌年公表しているのである

から、明治7年代には西の人間性論は、『知説』のそれに傾いていることが知られる。

もちろん『知説』の執筆に当って、『生性発蘊』が重要な資料になっていたであろうことは、疑いえない。一方、『生性発蘊』は、明治17年ごろも執筆を続けられていた『生性割記』の前篇的な性格をもっている点もあって、資料としてもかなり重要なものであることは、間違いない。

ここでは紙数の関係上、『知説』と本書の比較検討は、つぎの機会にゆずり、本書の人間性論を明らかにすることと、その人間性論と前掲論文に論じた『百一新論』の人間性論との比較を行ない、西が慶応2～3年のころから明治4年～6年ごろの時間的推移に従って、どのように人間性論についての関心が移っていくかを明らかにすることにとどめよう。

## 1. コントの人間性論

さて、すでに拙論『西周による統一科学の試み』のなかで述べたように、『生性発蘊』を執筆した動機は、統一科学の基本問題であった生理と心理との空隙を埋めることにあったのであるが、西は、この問題に着目していくうちに、コントの人間性論にしだいに注意を向けるようになった。すなわち、西が当面の生理と心理の一貫性を求めるのに、G. H. ルイスの書に当って解決しようとしたのであるが、ここにはオーギュスト・コントの科学哲学と人間性論がかなり展開されていたのである。

ところで、『生性発蘊』のなかでルイスの書が翻訳されている箇所は、第一に、第一巻、第一篇の主要部分であり、これは G. H. Lewes, “A Biographical History of Philosophy,” 1857<sup>(1)</sup> の最後の章を訳述したものである。第二に、第二篇の後半部分では、同じく G. H. Lewes, “Comte’s Philosophy of the Sciences,” 1853<sup>(2)</sup> のなかの第一巻、16章、17章、18章、19章、20章、21章が翻訳されている。これら二つのルイスの書の翻訳箇所は、いずれもオーギュスト・コントの哲学を略述したものであり、しかもこのなか

に人間性論が含まれているのであるから、『生性発蘊』で取り扱われた人間性論は、ルイスが紹介したコントの人間性論であるということになる。

まずわれわれは、『生性発蘊』のなかに展開されたコントの人間性論を明らかにしてみよう。ところで、この人間性論を主として展開しているのは、ルイスの“Comte's Philosophy of the Sciences”を翻訳した部分である。

コントは、まず生を植物と動物、つまり植性と動性とに分ける。そして、この両方の生体領域にわたって同一の理法が貫通しているものと見るのである。これが「人獣草木ノ同一理」<sup>(3)</sup>である。この同一理は、植物から動物へと領域がしだいに上等になるにしたがって、変化したり発展したりするのであり、あるいは別の理法がその理法の上に附加されていくこともあって、それらの組合せによって諸種の生体領域ができるのである。

では、最初の「人獣草木ノ同一理」とは、何であろうか。コントは、これを「生体学 Biology」<sup>(4)</sup>の立場から見ようとする。すなわち、その理由は、「細胞状ノ繊維 the cellular tissues」<sup>(5)</sup>である。この「細胞状ノ繊維」は、「機性ノ百体ニ、現レザル「ナキヲ見レハ、繊維最第一ノ本質」<sup>(6)</sup>であるといわれる。そこで、「其他諸状ノ繊維ノ如キ、上ミ人身ニ於テハ、特ニ明亮ナリト雖ドモ、機性愈々下タレハ、諸状ノ繊維愈々少ウシテ、細胞状ノ繊維愈々多ク、遂ニ動性ノ最下等ト、植物トニ於テハ、唯細胞状ノ繊維可ナルヲ見ル」<sup>(7)</sup>わけである。

ところでこの「細胞状ノ繊維」は、解剖学から見て「繊維」といわれるが、生理学では「性質 property」<sup>プロパティ</sup>と同意義であると考えられている。また「繊維」が持つ「機官 organ」<sup>オルガン</sup>は、生理学では「官能 function」<sup>フアンクシヨン</sup>と同意とされている<sup>(8)</sup>。そしてこの植性の基本的「理」である「繊維(性質)」が持つ「官能」は、「吸収 absorption」<sup>アブソープシヨン</sup>と「発泄 exhalation」<sup>エクスハレシヨン</sup>の二つとされるのである<sup>(9)</sup>。

「吸収」とは、繊維が外物を吸収して自己の部分とするという「引類

化同 assimilation」の理法に従って「滋養 nutrition」を取ることであり、これをまた「生長 growth」というのである。「発泄」とは、同じく「引類化同」の理法に従って同化できないものを外に排泄する働きである。これらは、また「消化 digestion」と「分泌 secretion」ともいわれるものである。そしてこれらに「伝生 generation」と「死没 death」が加わって、動性と植性とに通じた四つの官能すなわち、1) 吸収、2) 発泄、3) 引類化同、4) 生長、伝生、死没が「人獸草木ノ同一理」として存在すると考えたのであった。<sup>(10)</sup>

さて「細胞状繊維」は、「諸種ノ繊維」<sup>(11)</sup>に変容発展していくのであるが、植性と区別された動性の持つ「繊維」は、「筋肉維 muscular tissue」と「脳髄織 nervous tissue」であり、いずれも細胞状繊維が進化したものと考えられている。前者は「維質 fibrine」を「素」とし、後者は「脳質 neurine ト名クル硝化物」を「素」としているといわれる。<sup>(12)</sup> これら二つの繊維の持つ官能は、それぞれ「惕縮 contractility」と「触覚 sensibility」であり、これが「正サニ、植動ノ間ヲ、画別スル所」であるとされる。つまり、コントは、この「惕縮」と「触覚」とを動性の繊維が示す根源的な事実と見て、そこからそれぞれ「行動 locomotion」と「感覚 sensation」という動物固有の現象が出てくると考えた。<sup>(14)</sup>

ところで、筋肉の「運行 action」には、反射運動や無意識の行動のような「意思ニ属セサル involuntary」行動と「意思ニ属スル voluntary」行動とが分けられる。<sup>(15)</sup> もちろんこの二種類の行動は、截然と分けられるものではなく、その間に条件反射の運動のような、どちらともいえるような「第二種ノ自動力 secondary automatic actions」などが含まれている。たとえば、初めは意思的に行なった運動が練習や習慣により意思の働きを経ないでも運動が行なわれる場合の行動である。<sup>(16)</sup> 西は、これに註を加えて、「第二ノ自動力ハ慣習自然ノ如キ者ヲ指ス、人ノ技能ニ於テ多ク之ヲ見ル」<sup>(17)</sup>といている。

さて、コントは、第三種の行動として「機性動 organic actions」<sup>(18)</sup>を挙げる。この行動のなかに「本能 instincts」が含まれるのである。いま本能が人間性のなかでどんな地位をしめているかを考えてみることにしよう。

すでに述べたように、コントにおいては、動物の性として脳髄維の性質としての触覚とそれから変化発達した「感覚」、および筋肉維の性質としての惕縮とそれから変化発達した「行動」が、二大性質として挙げられるのであるが、これらの性質から「湊合」して現われてくる現象がそれぞれ「心意 mind」と「強力 strength」<sup>ストレント</sup>と呼ばれるものである。すなわち、

「夫レ触覚ハ、脳髄維ノ性質ナリ、此性質ノ本ツク所ハ、其纖維ノ特別ナルニ在リ、是猶惕縮ハ、筋肉維ノ性質タルカ如シ、故ニ其一ノ湊合セル見象ヲ指シテ、之ヲ心意ト名ケ、他ノ一ノ湊合セル見象ヲ、<sup>ストレント</sup>強力ト名クル者ナリ。」<sup>(19)</sup>

ここで「其ノ一ノ湊合セル見象」以下の英文は、“ We call the collective manifestations of the one, Mind; we call some of the other, Strength.”である。したがって、「其ノ一」と「他ノ一」とは、現代的に訳せば「前者」と「後者」であり、それぞれ「前者」は「脳髄維」の性質、触覚を指し、「後者」は「筋肉維」の性質、惕縮を指すことになる。それゆえ、「心意 mind」とは、脳髄維の性質たる触覚や感覚その他の総合的現象を指すことになるし、「強力 strength」は、筋肉維の性質たる惕縮や行動その他の総合的現象を指すことになる。

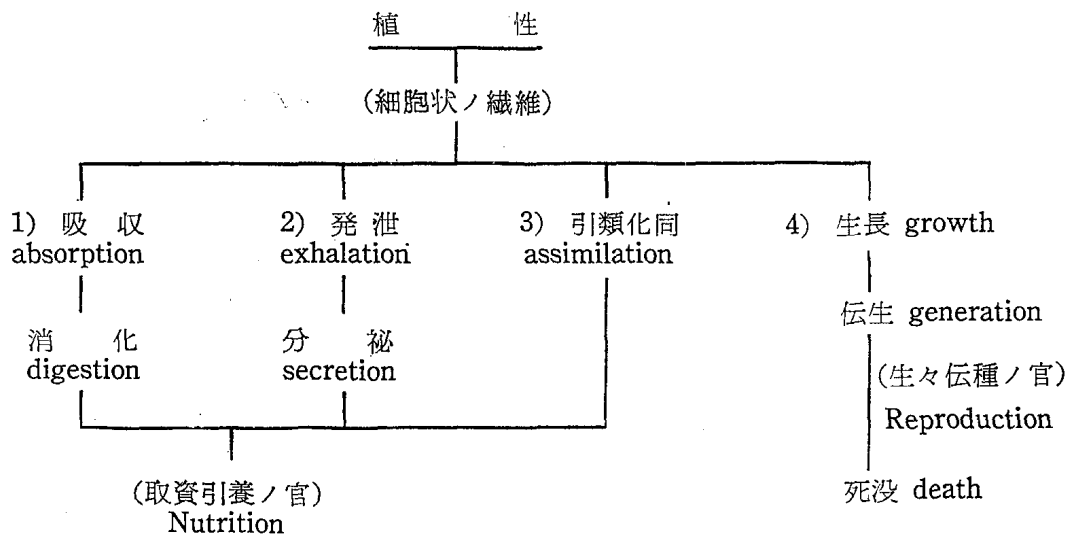
では、上述の人間性のなかで、本能はどんな地位をしめるのであろうか。それは、「機性動 organic actions」といわれるが、また「初生ノ理性 a rudimentary reason」<sup>(20)</sup>とも呼ばれている。あるいは、本能は、理性と「同ジク是一勢力」<sup>(21)</sup>つまり同一であるとういのである。

このように見てくると、本能は、「心意」ときわめて密接な関係にあるのであり、むしろ本能は、心意の一面であるといってもよいのである。実際にも、『生性発蘊』では、つぎのようにもいわれているからである。すなわち、

「蓋シ本能ノ実ハ靈智ニ異ナラスシテ、唯其機官単純ナレハ官能從テ單純ナル耳、心意ノ見象ノ初発ノ時、之ヲ本能ト名ケ、而テ其錯綜組織スル者ヲ靈智ト名ク、唯腦髓經ハ其中央ノ部位ニ帰注スル者ノ何タルヲ論セス、一種ノ腦質タルヲ以テ心意モ亦其見象ノ強弱アルト諸種アルトニ拘ラス一種ノ心意タリトス、蓋シ人亦禽獸ト同シク二様ノ活機ヲ有ス、其一ハ植性トシ、其一ハ動性トス、亦心意上ニ就テ同シク二様ノ生機ヲ有ス、其一ヲ本能トシ、其一ヲ理性トス。」<sup>(22)</sup>

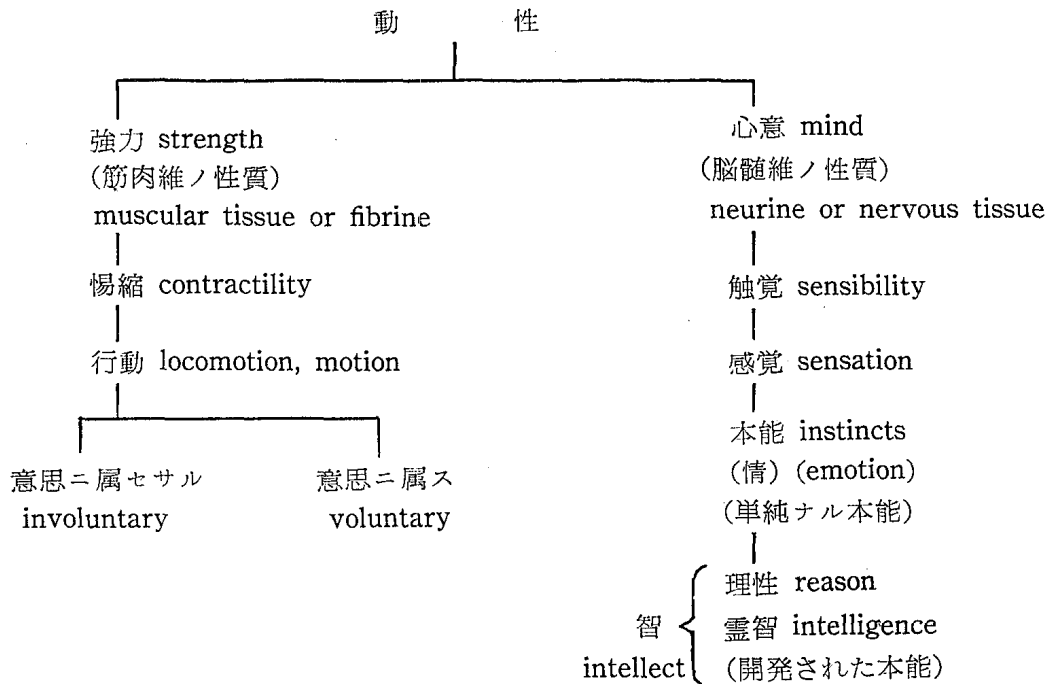
この引用文からも明らかになるように、「本能」は、脳髓維の性質に属する心意の一面であるということになる。そして本能は、「初発ノ時」の心意であり、理性または靈智は、心意の「錯綜組織」したものであるわけである。

さてこれまで述べてきた植性と動性の内容を表にまとめてみれば、つぎのようになるであろう。すなわち、表は、植性と動性の二つに分けられ、植物は植性のみを有することになるが、動物は植性を持つとともに、さらに動物特有の動性を付け加えることになるのである。



上表のうち 1) から 3) の性質は、「取資引養ノ官」にかわり、4) の伝生は、「生々伝種ノ官」<sup>(23)</sup>にかかわるとされている。

一方、動性の表は、つぎのとおりである。すなわち、



さて上表から理解できるように、コントは、心意、本能、理性、靈智といったものを動性のなかに数え入れており、けっして人間だけに固有な性質とは見なかったのである。いいかえれば、これらのものは、人間と禽獸に共通して具わるものとして見たのであった。<sup>(24)</sup>そこでコントの人間性論にとって、動性たる本能論が中心的な地位を占めることになるのである。それゆえ、つぎに上表の本能および開発された本能（理性）の部分の内容を明らかにすることにしよう。

## 2. コントの本能論

すでに述べたように、本能は「初発ノ心意」をいうのが、それはまたさまざまな情 emotion を本質とするものであった。そこで、『生性発蘊』では、本能と情とは、交互に置き換えられるものである。この情は、コントにおいては「単ナル智ノ上ニ位」<sup>(25)</sup>するものであり、従来のプラトンの智中心主義に対して、情中心の見解が示されている。

ところで、この情は、大きく二つに分かれており、一つは「自身(立)ノ



情 personality」, 他は「相養ノ情 (為群) sociality」に分けられている。後者は、すでに前掲論文で述べた徂徠の「親愛生養の性」および『百一新論』の「為群ノ性」と一致するものとして、西に理解されたものと見られる。

さて「自身ノ情」は、下等の動物に多く現われるが、上等の動物には、「自身ノ情」とともに、「相養ノ情」も現われるものと考えられている。この二者は、「自愛性 Egoism」と「他愛主義 Altruism」ともいわれるものである。「自立ノ情」は、「自護自保ノ本能 the instincts of self-preservation」から生ずるが、「生類相互ニ相生養スル」ためには抑制されなければならないのであり、そこで「自立ノ情」を克服して「為群ノ情」に従わせなければならないというわけである、しかし、人間においても、「自立ノ情」はきわめて強烈であって、「為群ノ情」は劣っているので、ここに「人間上ノ大ナル問題」<sup>(26)</sup>が出てくるのである。

ところで、後者の「為群ノ情」または「他愛性」は、前者の「自立ノ情」にくらべて弱い本能であるが、「尊キ」本能であり、しかも「智ニ属スル諸官能」と近く相接するところの「為群仁愛ノ本能 social sentiments」であるといわれる。<sup>(27)</sup>

さて以上の二つの対立する本能とその間に介在する本能によって、コントの本能論は、成立するのであるが、これらの本能には、それぞれまた特殊な本能が属している。たとえば、「自立ノ情」または「自愛性」に、コントは、1)「自保自護ノ本能 the instincts of preservation」すなわち「保養ノ本能 nutritive instinct」を挙げ、つぎに「延伝嗣伝種ノ本能 the preservation of the species」として 2)「和愛媾感ノ本能 the sexual instinct」と、3)「慈育乳養ノ本能 the maternal instinct」を数え挙げる。つぎに、「求達期全ノ本能 the instincts of perfectibility」として 4)「武克争闘 the military instinct」と 5)「勤勞力作ノ本能 the industry instinct」を挙げたのである。これらの本能は、人獣いずれにも共通してい

るといわれている。<sup>(28)</sup>

以上の自愛性から他愛性にいたる中間に、コントは、「驕傲 pride」または「権勢ヲ愛スル本能 love of power」と「養望 vanity」または「人望ヲ好ム本能 love of approbation」の二つの本能を数え上げるのである。これら二つの本能は、「元来自立ノ本能ナレトモ、其感発ヲ<sup>シヨウコウ</sup>浹スル運用ニ於テ外部ノ景況ニ依テ変化ヲ受ケ為群トナル者<sup>(29)</sup>」であるといわれる。つまり、これらは、自立を主とする自己顕在欲であるが、なお為群 social ともなりうるものとされている。

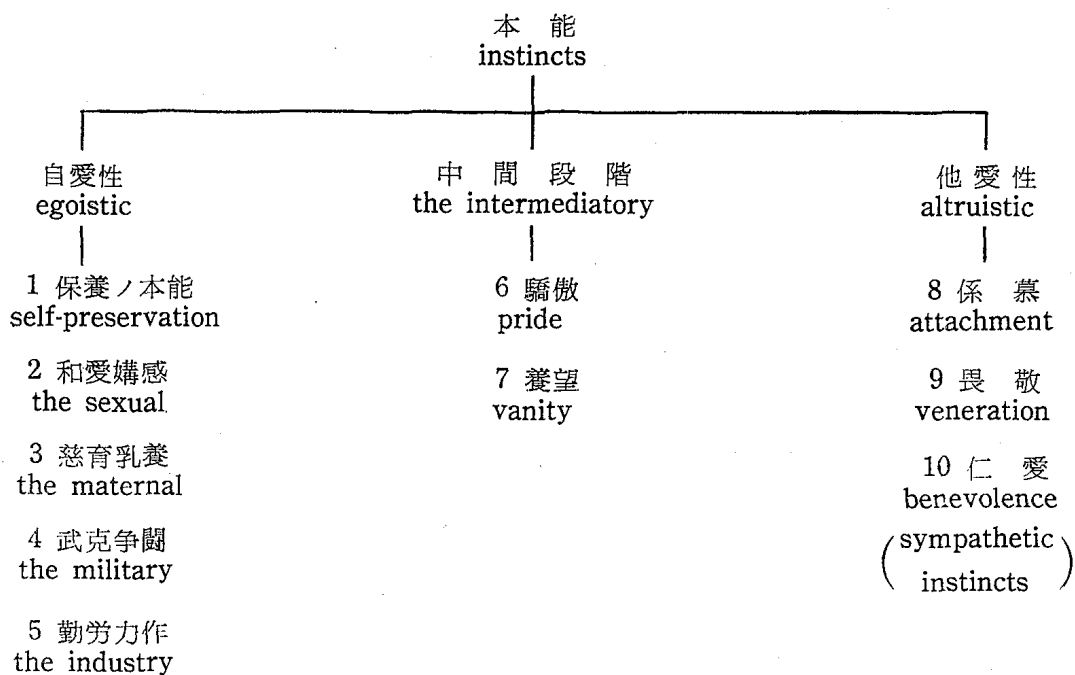
これに対して、他愛性の本能は、<sup>ダイグニタイ</sup>尊いものであるが、尊さが加わるに応じてエネルギーは減少していくものである。これは、<sup>ソシヤル</sup>為群に直接かかわるものであり、しかも、人間だけでなく禽獣も持つものであった。そして社会的見地からすれば、この他愛本能が優位を占めなければならないと同時に、これは個人の<sup>モラル・コンディションズ</sup>道徳的条件（「心術上ノ徳性」）に影響するものである。このような「同感ノ本能 sympathy instincts」を発達させて「心術上ノ徳性」を向上させることが、「実理礼数ノ自然ノ断言 the natural conclusion of Positive Morality」であつた。<sup>(30)</sup> この道徳論は、西の『百一新論』、『智説』、『生性割記』を通じて、共通の主旨であり、西がコントの道徳論にも、ひじょうな共鳴を覚えたにちがいないのである。

しかしながら、この他愛の本能を「<sup>(31)</sup>最高度ニ開発セシムルノ天賦ハ唯人」にだけある。つまり、人禽を通じて共通に存在する他愛本能ではあっても、その本能を開発して真に道徳的にしうるのは、人間だけであると考えられるのである。

では、この他愛本能には、どんなものが入れているのであろうか。コントは、1)「係慕 attachment」、2)「畏敬 veneration」、3)「仁愛 benevolence」の三者をこれに入れている。第一の係慕は、ただ二者だけを結びつけるが、畏敬は、一層広い範囲の結合をもたらし、しかも「自己ノ甘心服従 voluntary submission」つまり自ら進んで服従する性質を持

つものとされている。第三の仁愛は、「有情区ノ連鎖ノ最末 the extreme limit of emotional series」であり、1)と2)と同じく、動物にも見出されるとしても低い程度であり、そのなかにはいろいろの変容が見られるといわれる。すなわち、それは、「国民ノ為ニ同感ヲ発スル大義 the vast sentiment of patriotism」から「唯一人ニ対シテ同感愛憐ノ情 individual sympathy」にいたるまでの種々相を含むものである。コントは、ここに道徳性を認め、教育もこの「同感ノ情」に基づかねばならないと主張したのである。<sup>(82)</sup>

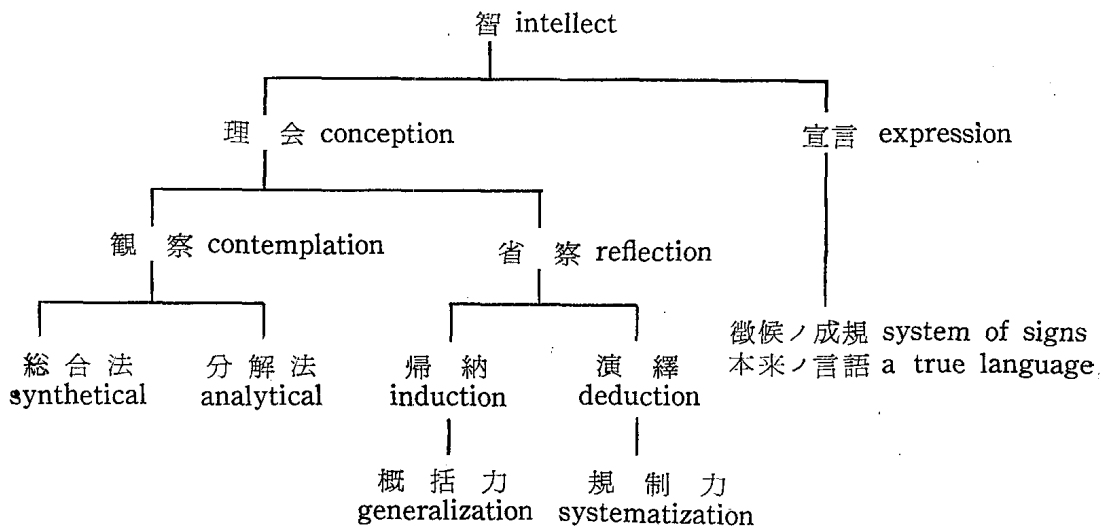
以上の本能論を表にしてみれば、つぎのとおりである。



### 3. コントの智論

さて上述の本能論がコントの情論であるとすれば、最後に智 intellect はどう考えられたのであろうか。智は、すでに述べたように、情、すなわち本能の下に位するものであった。あるいは、智は、開発された本能であり、本能全体の下に所属するものであった。この智の能力とは、「情部ノ衝

動ヲ十成セシムルノ方略ヲ教フル者<sup>(33)</sup>」つまり情本能を充足させる手段を示唆する能力であるとされる。この能力には、「記性 memory」,「弁別 judgment」,「想像 imagination」がはいるが、これらの能力は単一の能力ではなく、智の元素的な諸官能が総合されてできた状態と考えられている。それでは、智の元素的な諸官能とは、どんなものであろうか。コントによれば、智の能力はつぎのような表に示されるような元素的諸官能を持つものである。すなわち、



さて心意の一つの機能としての能力は、外からはいつてきた印象を引き延ばし、これらの印象に心意が働きかけて外部に対して逆に作用するという働きをする。すなわち「心意の運用ハ唯外部ノ感動ノ遷延スル者ニシテ、再ヒ外部へ心意ヨリ反動スルノ理ニ外ナラス<sup>(34)</sup>」といわれる。この印象と働きかけの二過程が「論弁 reasoning」には必要なのであって、この二つの過程の上に「理會 conception」が成り立つのである<sup>(35)</sup>。したがって「理會」には外からの「感動 (印象)」に対する心意の「反動 reaction」の一つの側面である「観察 contemplation」が含まれる。すなわち、「観察=依テハ心意五官ノ媒价=依テ外部ノ感動ヲ受ク」といわれる。そして観察する「照影 images」の名前が「観念 ideas」<sup>(36)</sup>と呼ばれるのである。これに

対して「理会」にはもう一つの働きが区別される。それは、「省察 reflection」である。これは、これらの「感動」を組み合わせ、一般の行動に適用する働きである。<sup>(37)</sup> これもまた、「感動」と「反動」の働きのうちにつまり「理会」のうちにはいるからである。なおこれらの能力は、人間にも動物にもそなわった能力であるとされるのである。

ところで、前の観察には、さらに二つの働きが区別される。一つは「総合法ノ官能」であり、他は「分解法ノ官能」である。前者は、具体的性格すなわち「コンクレート・キヤラクター実体ノ性」をそなえ、ビーイングス存在にかかわり、アブストラクト・ネージュア実在的個別的観念の元になるが、後者は抽象的な性格、すなわち、「アブストラクト・ネージュア理体ノ性」であって、イヴェンツ事象にかかわり、「ジェネラル コンセプション概通ノ理会」または「アーチフィシャル構意」にかかわるとされる。<sup>(38)</sup> そこで分解は、学に適し、総合は、術に適すといわれるのである。

これに対して、省察もまた、二つに分けられる。すなわち、帰納術 induction と演繹術 deduction である。前者は、「本理ヲ示ス by stating principles」ことであり、後者は、「判断ヲ援ク者 by drawing conclusions」であり、ともに、省察を支えるものであるとされている。また前者は、「概括力 generalization = 偏シ、演繹ノ方法ハ規制力 systematization = 偏シ」<sup>(39)</sup> ているとされる。

以上の「理会」に対して、「宣言 expression」はどうであろうか。宣言は、理会を前提とし、理会の先導の下に「人間ノ交際并ニ礼義ニ進ミ、風化ヲ開クノ一術一器トシテ理会ニ欠ク可ラサルノ(40)属具」であるとされる。したがって「為群ノ性」を多少とも持った生類には欠くことのできないものである。したがって、これは、「(41)宣言通意 communicative」ともいわれている。ここには記号体系、すなわち、「徴候ノ成規」が含まれ、行動によって表わしたり、言葉やその他の記号によって表わす本来の言語が所属するわけである。

以上のように、智の能力は、総合法、分解法、帰納、演繹、言語の五種類に分類されたのであった。

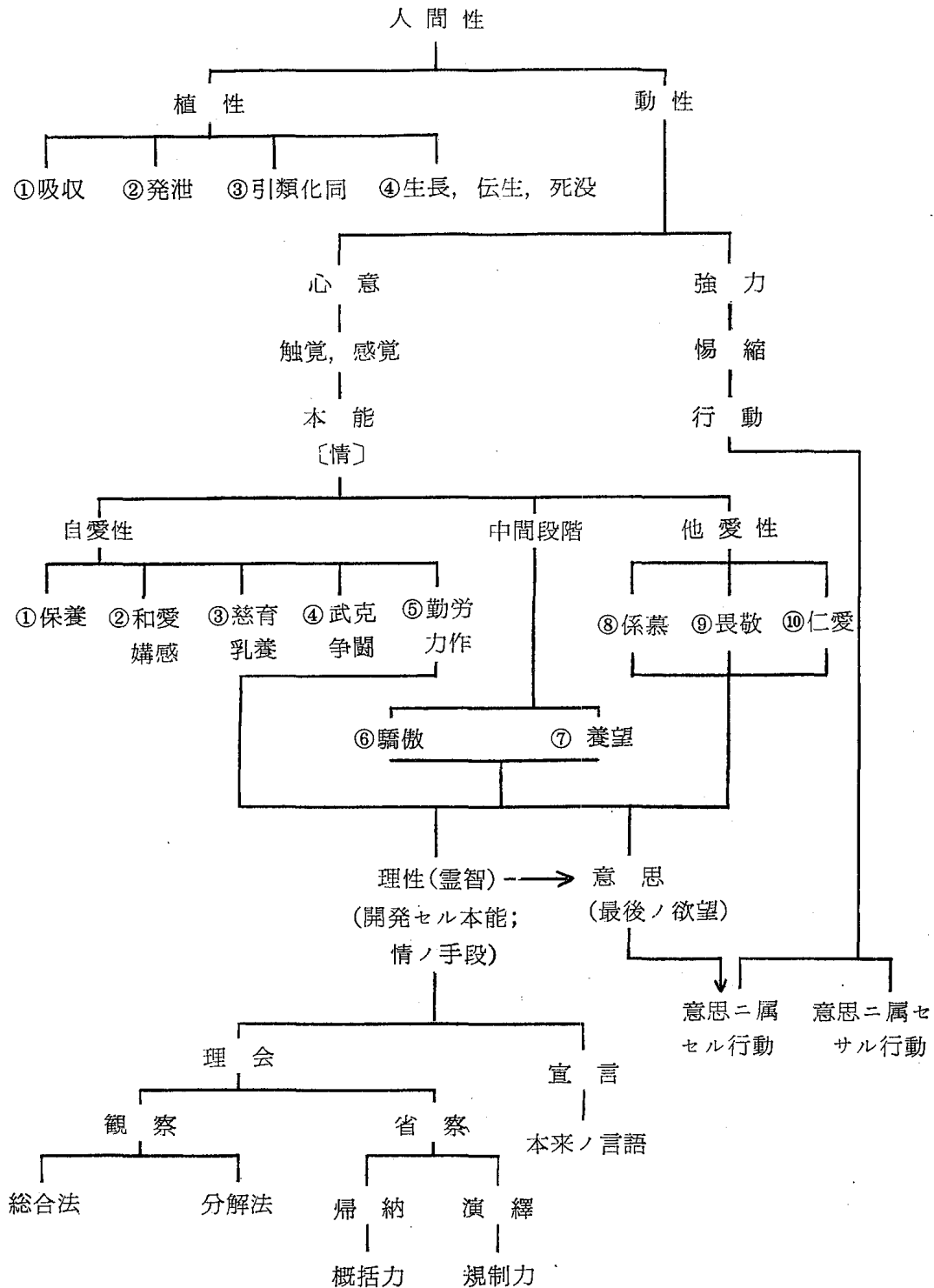
それでは、昔は智の能力の一種と考えられた「意思」は、どこに所属するのであろうか。意思 will は、情の部に属するものとされる。というのは、意思とは、「心意上、思量の運用ニ依テ一ノ旺スル衝動ニ本ツキ決定ニ至ル時、最後ノ<sup>デイサイア</sup>念願ノ状ヲ<sup>(42)</sup>徴スル者ナリ」とされるからである。いいかえれば、意思は優勢な衝動（情）をもとにして、智的熟慮が決定するにいたったところの欲望の最終段階であるからである。しかし、意思は、情ではあっても、智の機能とは密接に結びついた働きである。そこで、心意のなかでは本能（情）のなかでも智と関係する性質をもつものであるといわなければならないであろう。

#### 4. コントの人間性論のまとめ

さて以上述べてきた見解を総合してみると、人間性というものは、つぎのようなものであるということになろう。すなわち、

1. 人間は、動物と同じように、植性と動性とを含んでいる。
2. 人間の植性は、動物のそれと同じく、生物学的生理学的性質であり、吸収、発泄、引類化同、生長、伝生、死没を含んでいる。
3. 人間の動性は、強力（行動）と心意とを含み、前者は意思に属しないものと意思に属するものを含み、心意は本能または情と他方で理性（智）を含んでいる。ここで、コントが心意と行動、動性と植性を分けるのは、これらが二つの独立体をなしているということから分けるのではない。むしろコントにおいては、<sup>マインド</sup>心意と<sup>ライフ</sup>生活とは、「本然ノ<sup>(43)</sup>別」があるとは考えていない。これらは、もともと一体なのであるが、ただ現象が違うことから研究法も違わねばならないという意味で区別されているだけである。したがって、プラトンのような靈魂の不滅、肉体の滅亡という見解は、ここではまったく見あたらないのである。この『生性発蘊』の見解は、西の後の『生性割記』の思想につながっていくものである。この点については後にふれるであろう。

4. 人間の心意中、本能には自愛性として保養，和愛憐感，慈育乳養，武克争闘，勤勞力作の本能があり，他愛性として係慕，畏敬，仁愛という



道徳に深い意義を有する本能があり、これらの中間段階に驕傲、養望という本能がある。

5. 人間の理性、智は、本能が開発されてきたものであるが、<sup>コンセプト</sup>理会すなわち観察（総合法と分解法）と省察（帰納と演繹）、および宣言として記号体系（言語）を含んでいる。

6. 人間性の主体は、本能、すなわち、情であり、情によって人間は、支配され行動を行なうにいたる。この意味で、コントの人間性論は、情中心、情主位主義の考え方に立っている。

7. 意思は、人間性の主位を占める情に属しており、しかも智の機能と密接に関連するものとみなされている。

8. 以上の人間性は、すべて動性のカテゴリに組み入れられているように、動物と共通するものである。しかし人間は、これらの動物性を最高度に開発し発達させることができると考えられており、この点で人間と動物とは違うものとされている。

これまで述べてきた『生性発蘊』の人間性論の表を一にまとめて表わしてみれば上図のようになる。

## 5. 『百一新論』と『生性発蘊』の人間性論の比較

以上のコントの人間性は、前掲論文で取り扱った『百一新論』における西周の人間性論とくらべれば、細かい点では前者の方がより詳細であるが、大筋ではやや似かよった点が見出される。たとえば、『百一新論』の生物学的生理学的性質と『生性発蘊』の植性、また前者の心理を生み出す先天的人間性のなかの a) 禽獣と同一の性（七情、「為群ノ性」）と b) 人間のみにある性（恥、悔、「思惟ノ規則」）に対して、後者のいう動性のなかの本能（情—自愛性対他愛性）と理性の分類などは、やや重なり合う所が見られる。もちろん、後者の本能（情）の分析は、前者の徂徠に近い七情の分析にくらべて、近代科学の成果を大きく取り入れている点で異なってい



る。しかしまた、西のいう後天的心理は、先天的人間性を培養していったあかつきに生まれる徳目であり、「自主自立ノ権」, 「所有ノ権」, 「同感」, 「相生養ノ道」などが含まれているが、これと対応して、上述の8に述べたように、コントの人間性論も、動性を広く最高度に開発していくところに道德、同感にもとづく礼儀道德が生まれると考えていた点で、類似点が見出される。このような点について、西は、『百一新論』に展開した人間性論の延長上において、コントの人間性論を参照し、これを資料として来るべき西自身の人間性論を構想していったといえることができる。

さらに、この『生性発蘊』は、『生性割記』とのある種の関係が見られるのである。とくに本書の情中心主義の人間性論のなかで、意思を情に属させている見解は、後の『生性割記』の意中心主義の人間性論に深い関連があることを示しているのであり、この点でも。本書は、『生性割記』の伏線的地位を占めていたといえることができる。

一方、本書の情中心主義は、明治7年に公表された『知説』の智中心主義の見解と矛盾している。西が明治年4から6年にかけて執筆した本書の主張が情中心主義であるのに、明治7年に書かれた『知説』がなぜ智中心主義であるのか。この問題は興味のある問題である。いったい西の人間性論は、『生性発蘊』(明治6年), 『知説』(明治7年), 『生性割記』(明治17年)と並べてみたとき、情中心主義、智中心主義、意中心主義と揺れ動いているように思われる。もっとも、『生性発蘊』は、コントの人間性論であり、西の資料であり、『生性割記』の伏線であるから、西自身の人間性論としては、智中心主義から意中心主義へ移行していくのである。しかも、最初の『知説』の智中心主義は、コントの情中心主義の人間性論を資料として検討しながら、この智中心主義をとったのであり、また『生性割記』の意中心主義は、コントの情中心主義にある点に戻っていく傾向を示したのである。これらの点の解明は、紙数の関係上、次回にゆずることにしよう。

(1) 西は、G. H. Lewes, A. Biographical History of Philosophy の 1857 年版のコント紹介部分を翻訳したものである。西の翻訳した書は、最初 1843 年—1845 年にかけて一般向きに書かれたものであるが、1857 年にかなり改冊を行ない、The Library Edition とした一冊本である。その後 1871 年に大改冊を加えて、二巻本となり、名前も、History of Philosophy, I, II, London, Longmans, Green, and Co. となり出版された。わたくしが手に入れることのできた A Biographical History of Philosophy, London: George Routledge & Sons, Limited, 1900 の版は、1857 年版に多少は手を加えたものようであるが、1871 年版の『哲学史』よりは、西周の翻訳部分とほぼ一致している。そこでこの三書、西周訳『生性発蘊』、1900 年版、1971 年版を対照させてみる。

ただし西周の『生性発蘊』は大久保利謙編『全集一卷』宗高書房のページである。

『生 性 発 蘊』	1871年版『哲学史』	1900年版『哲学史』
42ページ—43ページ。 6行目まで。	なし。	なし。
43ページ, 6行目下から 47ページ, 4行目まで。	pp. 692-693, 2行目	pp. 643-645.
47ページ, 9行目から 48ページ, 9行目まで。	pp. 693-694.	p. 646 の一部分を 除きなし。
49ページ, 1行目から 50ページ, 8行目まで。	pp. 716-717. および p. 718. 第2パラグラフ。	pp. 646-647.
51ページ, 2行目から 53ページ, 4行目まで。	p. 716. 中段パラグラフ。 から p. 718 まで。	pp. 649-649.
53ページ, 8行目から 57ページ, 12行目まで。	なし。	pp. 649-651.
58ページ, 4行目から 62ページ, 3行目まで。	なし。	pp. 652-654.
62ページ, 4行目から 9行目まで。	なし。	なし。

したがって 1857 年版のほとんどの部分を、1900 年版の A Biographical History of Philosophy は保持しているものと見てよい。そこで 1900 年版をこの論文では参照しておくことにする。

## 西周の『生性発蘊』とコントの人間性論

さて西が『生性発蘊』で翻訳した部分は、1900年版によれば、Twelve Epoch, Chap. II, Auguste Comte, pp, 643-654の部分である。途中部分的に p. 646 と最後の数行の部分が1900年版にはない。

- (2) この部分は、わたくしが手に入れられた1897年版の G. H. Lewes, Comte's Philosophy of the Sciences: being an exposition of the Principles of the Cours de philosophie positive of Auguste Comte, Chap. 16—Chap. 21, pp. 173-232 までの訳で所々、略している部分もある。
- (3) 『生性発蘊』『西周全集一卷』宗高書房 p. 74; G. H. Lewes, Comte's Philosophy of the Sciences, London, George Bell and Sons, 1897 (1853), p. 178.
- (4) 同書 p. 70; G. H. Lewes, Comte's Philosophy of the Sciences, pp. 175-176.
- (5) 同書 p. 80; Lewes. p. 185.
- (6) 同書 p. 80; Lewes, p. 185.
- (7) 同書 p. 80; Lewes, p. 185.
- (8) 同書 p. 80; Lewes, p. 191.
- (9) 同書 p. 86; Lewes, p. 191.
- (10) 同書 pp. 86-87; Lewes, pp. 191-192.
- (11) 同書 p. 78; Lewes, p. 183.
- (12) 同書 p. 83; Lewes, p. 187.
- (13) 同書 p. 87; Lewes, p. Lewes, p. 192; ルイスの原書では、惕縮 contractility となっている。
- (14) 同書 pp. 93-96; Lewes, pp. 199-109.
- (15) 同書 p. 103; Lewes, p. 207.
- (16) 同書 p. 103-104; Lewes, p. 207-208.
- (17) 同書 p. 104.
- (18) 同書 p. 104; Lewes, pp. 208-209.
- (19) 同書 p. 100; Lewes, p. 204.
- (20) 同書 p. 105; Lewes, p. 209.
- (21) 同書 p. 105; Lewes, p. 209.
- (22) 同書 p. 111-112; Lewes, p. 214.
- (23) 同書 p. 70; Lewes p. 175.
- (24) 同書 p. 112-114; Lewes, p. 214-216.
- (25) 同書 p. 116; Lewes, p. 217.

- (26) 同書 p. 116; Lewes, p. 217.
- (27) 同書 p. 117; Lewes, p. 218.
- (28) 同書 p. 118; Lewes, p. 219-220.
- (29) 同書 p. 121; Lewes, pp. 220-221.
- (30) 同書 pp. 121-122; Lewes, pp. 221-222.
- (31) 同書 p. 122; Lewes, p. 222.
- (32) 同書 p. 122; Lewes, p. 222-223.
- (33) 同書 p. 124; Lewes, p. 224.
- (34) 同書 p. 125; Lewes, pp. 226-227.
- (35) 同書 p. 125; Lewes, p. 227.
- (36) 同書 p. 127; Lewes, p. 229.
- (37) 同書 p. 127; Lewes, p. 229.
- (38) 同書 p. 127; Lewes, p. 229.
- (39) 同書 p. 128; Lewes, p. 230.
- (40) 同書 p. 126; Lewes, p. 228.
- (41) 同書 p. 127; Lewes, p. 229.
- (42) 同書 p. 125; Lewes, p. 226.
- (43) 同書 p. 109; Lewes, p. 212.

**An examination of Auguste Comte's theory of human  
nature in Nishi Amane's "Seiseihatsuun"**

*Takashi Koizumi*

**Résumé**

This is the second article in the series of study of Nishi Amane's theory of human nature. In this article we deal with his "Seiseihatsuun" which is supposed to have been written in about 1871-3.

Although Nishi's "Seiseihatsuun" includes his own writings in part, yet the most part of it consists of his translation from G. H.

Lewes' writings such as "A Biographical History of Philosophy" and "Comte's Philosophy of the Sciences." Accordingly we find Lewes' explanation of Comte's theory of human nature in this book.

In this article we discuss Comte's theory of human nature and examine to what extent Nishi made use of Comte's theory as material in comparison with Nishi's "Hyakuichishinron."